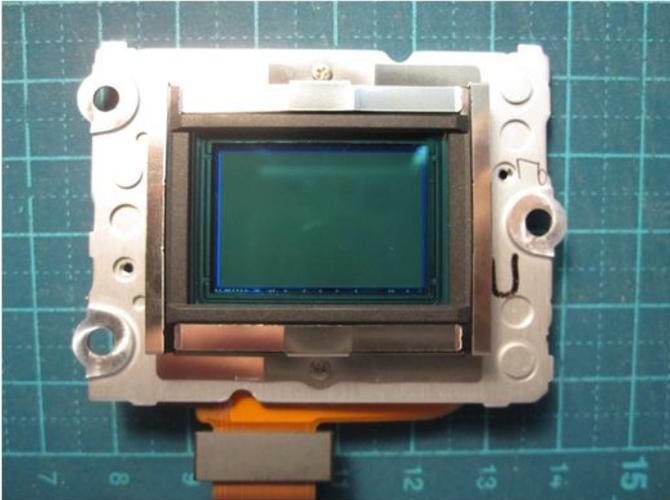


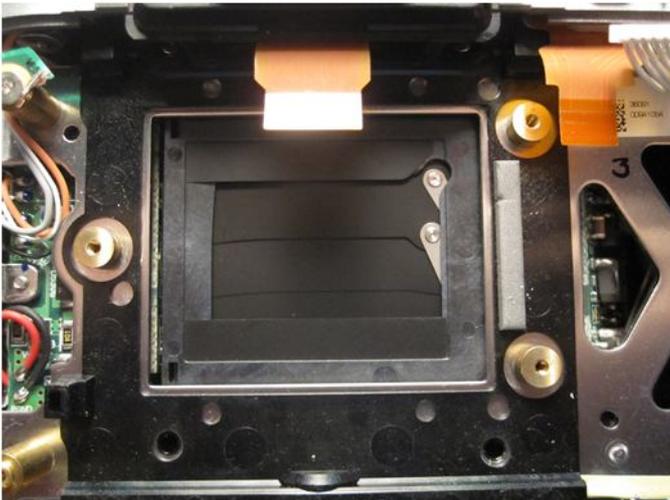
「デジタルカメラを分解する (3)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

デジタル一眼レフカメラの分解も、少しずつ進んできた。いよいよ、デジカメの心臓部、CCDの正体がわかる時だ。



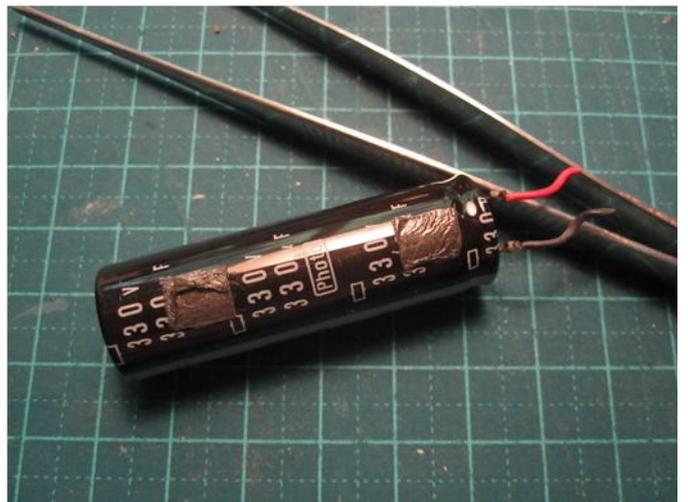
これがCCDである。ここで、被写体からの光を電気信号に変換するわけだ。見たところ、別にものすごいものではない。かつてのカメラは、この部分にフィルムがあったわけだ。CCDについては、後ほど更に細かく観察することにした。



これはCCDを取り去ったあとに「出現」した、シャッター幕である。この部分だけは、フィルム式のカメラと構造的に大差はない。この部品だけは機械式なので、シャッターを切るたびに物理的に摩耗して、結果的に故障したわけだ。ニコンに依頼すると、交換に数万円かかる。部品代よりも、分解修理の工賃だろう。自分で分解してみて、高い理由がわかった。



これはフラッシュ部分。取り出すと、長細い蛍光灯のような電球が出てきた。これをものすごく明るく光らせるには、相当な電気容量が必要だろう。きっと、大きなコンデンサーが内蔵されているはずだ。



やはりあった。カメラの大きさの割に、相当デカイ。これはフラッシュ用にちがいない。昔のフラッシュは、充電時に「ピーー」と音が高まっていったが、今は無音なのが面白くない。(つづく)